

廣川林遺跡（3次調査）

福岡県八女市大字鵜池字廣川林所在遺跡の調査報告
八女市文化財調査報告書 第66集

2002

八女市教育委員会

序

現在八女市西部地区は、効率的な農業を目指した農村活性化住環境整備事業が完成し、活発な生産活動が行われています。

また、八女インターチェンジ周辺では工業団地造成や周辺整備事業が進み、企業誘致が盛んに行われ、急速な工業地化の波が押し寄せています。

さて、今回調査を行った鵜池地区は、九州縦貫高速道の八女インターチェンジが隣接しており、また、八女地域の主要道路である国道442号線に面していることから、以前から多岐にわたる各種開発事業が盛んに行われています。

このような状況の中、同地域の西端部に鵜池第2工業団地内第2期工事が計画され、八女市教育委員会では事前に発掘調査を行い、記録上での保存を目的として調査を行うこととなりました。

発掘調査によって、これまで花宗川が刻んできた悠久の歴史と、この地域の発展過程の一部が明らかになった感がありますが、まだまだ知られざる過去の記憶は土の中で眠りについたままとなっています。

八女市教育委員会では、これら過去の記憶をこれからも大切に保護し、今後の地域発展の為、おおいに活用する所存であります。

本書は、先人達の記録を一部収録したものにすぎませんが、本書が皆様方の埋蔵文化財に対する認識とご理解につながり、さらには学術研究上においても役立つことが出来れば幸甚に存じます。

最後になりましたが、発掘調査に関し多大なご理解とご協力をいただきました八女市土地開発公社 理事長 小川 勲様をはじめ、開発公社の関係者の皆様方、そして発掘作業に従事していただいた作業員の方々、そして調査報告書などの作成にかかわった多くの方々に対し、心から感謝の意を表する次第であります。

平成14年3月29日

八女市教育委員会
教育長 樋口 欽一

例言

- 1 本書は鶴池第2工業団地造成に先だって調査を実施した、八女市大字鶴池字廣川林に関する発掘調査の成果を報告するものである。
- 2 発掘調査は八女市教育委員会が主体となり実施した。
- 3 遺構の実測は国土地理院の設定する第Ⅱ座標系を基準として行った。なお、本書に使用した方位は全て磁北である。
- 4 調査現場での遺構実測は参加者で行い、写真は大塚、山田が撮影した。
- 5 出土遺物の整理は、岩戸山歴史資料館において行った。なお、本書の編集、執筆は大塚が行った。

本文目次

I はじめに	P. 1
II 遺跡の立地と歴史的環境	P. 3
III 発掘調査の概要（南地区）	P. 6
＜遺構と出土遺物＞	
1 溝状遺構（SD）	P. 6
2 竪穴土壇（SK）	P. 12
IV 発掘調査の概要（北地区）	P. 12
＜遺構と出土遺物＞	
1 溝状遺構（SD）	P. 12
2 不明遺構（SX）	P. 16
3 その他（排土中遺物）	P. 17
V おわりに	P. 18

挿図目次

第1図 廣川林遺跡3次調査周辺遺跡分布図〔1/25, 000〕	P. 4
第2図 廣川林遺跡3次調査位置図〔1/5, 000〕	P. 5
第3図 廣川林遺跡3次調査遺構配置図（南地区）〔1/200〕	P. 7
第4図 SD-01 Na3～Na5土層断面実測図〔1/40〕	P. 8
第5図 SD-01 出土土器実測図〔1/3〕	P. 9
第6図 SD-02 出土土器実測図〔1/3〕	P. 10

第7図	SD-03	土層断面実測図〔1/20〕	P. 11
第8図	SD-04	土層断面実測図〔1/20〕	P. 11
第9図	SD-05	土層断面実測図〔1/20〕	P. 12
第10図	廣川林遺跡3次調査遺構配置図(北地区)	〔1/200〕	P. 13
第11図	SD-06・07	における切り合い関係〔1/100〕	P. 14
第12図	SD-06・07	土層断面実測図〔1/40〕	P. 15
第13図	SD-06・07	出土土器実測図〔1/3〕	P. 15
第14図	SD-08・09	出土土器実測図〔1/3〕	P. 16
第15図	SX-01	土層断面実測図〔1/40〕	P. 16
第16図	SX-01	出土土器実測図〔1/3〕	P. 17
第17図	SX-01	出土石鏃実測図〔1/1〕	P. 17
第18図	排土中出土土器実測図	〔1/3〕	P. 17

図版目次

PL 1	1. SD-01及びSD-02全景(北西より・後方は花宗川)
	2. SD-01全景(南より)
PL 2	1. SD-01東側近景(南より)
	2. SD-01No5土層断面(南より)
PL 3	1. SD-01No01須恵器出土状況
	2. SD-01No01須恵器近景
PL 4	1. SD-03全景(南より)
	2. SD-04・05全景(南より)
PL 5	1. 北地区全景(南より)
	2. SD-06・07全景(南東より)
PL 6	1. SD-06・07切り合い付近(北より)
	2. SD-06・07土層断面(南東より)
PL 7	1. SD-08・09全景(南より)
	2. SX-01全景(南より)
PL 8	1. SD-01 出土須恵器(杯蓋)
	2. SD-01 出土須恵器(杯身)
PL 9	1. SD-02 出土土師器
	2. SD-02 出土土師器

I はじめに

平成11年度において、八女市土地開発公社 理事長 小川 勲より埋蔵文化財包蔵地の確認調査依頼が提出された。これを受けた八女市教育委員会は現地踏査後、平成12年（2000年）1月26日に試掘調査を行った。その結果ピットや溝状遺構を検出した為、その保存対策について協議が必要である旨を連絡し、造成区域の北側を北地区、南側を南地区とし、平成12年6月より調査を開始。同年10月に現地調査は終了した。

調査は、途中筑後農林事務所より指導があり、やむなく中断の時期があったが、関係各位のご努力と深いご理解により、無事に終了する事が出来た。

尚、整理作業は平成13年度内において行った。

調査関係者は以下の通りである。

平成12年度

八女市土地開発公社

理事長 小川 勲

事務局

事務局長 伊藤周二

出納員 近藤紀子

嘱託職員 伊藤 實

八女市教育委員会

教育長 樋口欽一

教育部長 石松憲治

生涯学習課長 諸富和生

生涯学習課長補佐 志岐 徳

文化財係長 赤崎敏男

同係員 中川寿賀子

同係員 大塚恵治（調査担当）

同嘱託 山田朗子

平成13年度
八女市土地開発公社
理事長 小川 勲
事務局
事務局長 内田良徳
出納員 近藤紀子
嘱託職員 伊藤 實

八女市教育委員会
教育長 樋口欽一
生涯学習課長 諸富和生
生涯学習課長補佐 佐野正義
同参事 川島敏雄
同参事補佐 鹿野耕一
文化財係長 赤崎敏男
同係員 中川寿賀子
同係員 大塚恵治（整理担当）
同嘱託 山田朗子
同嘱託 小杉山大輔（11月より）

なお、本調査および整理作業にあたり八女市土地開発公社 理事長 小川 勲 様をはじめ、関係各位、地元町内会、地権者の方々には多大なるご配慮とご協力を受けました。紙上ではありますが、御礼申し上げます。

また、以下の方々には並々ならぬご指導、ご教示を受けた。記して感謝の意を表します。

小田和利（南筑後教育事務所）、永見秀徳、小林勇作、上村英士、柴田剛、立石真二（筑後市教育委員会）

Ⅱ 遺跡の立地と歴史的環境

【地理的環境】

廣川林遺跡は、福岡県八女市大字鶴池字廣川林に所在し、標高約17mの低位段丘上に位置している。九州の大動脈とも言える九州縦貫自動車道にあるインターチェンジの1つ「八女インターチェンジ」の周辺に位置しながら、これまでは農業、特にブドウ等の果樹の栽培が行われるにすぎなかった。しかし、隣接する筑後市においては、その地の利を生かし企業誘致が進んでおり、各種産業の店舗・工場等が数多く建設されている。

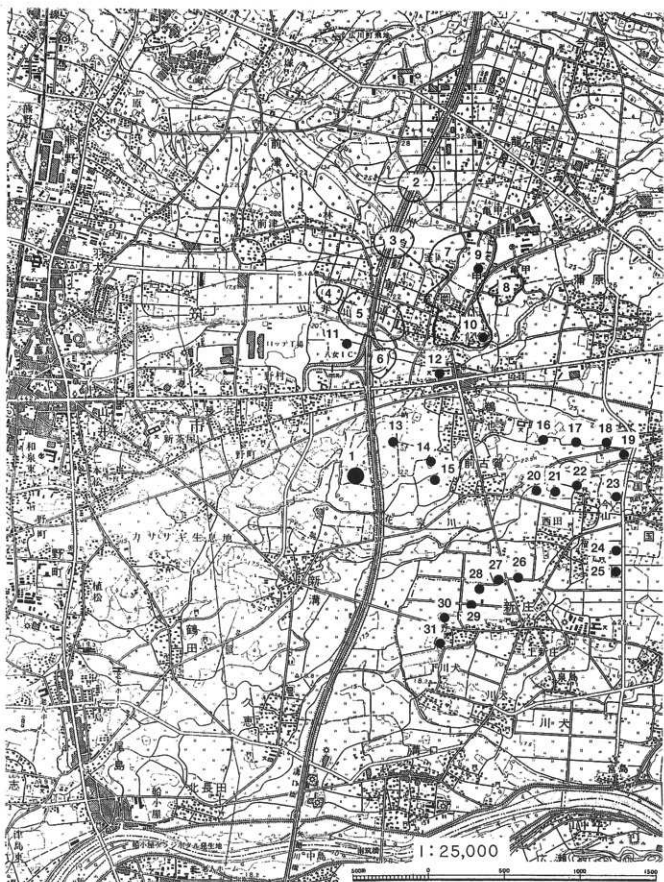
八女市は福岡県の南部地区に所在し、西に筑後市、東に上陽・黒木町、北に広川町、南に立花・瀬高町と、一市五町と境を接し、主に農業を主要産業としている。その立地は、耳納山地南緩斜面より西方に延びる八女丘陵と、福岡・大分両県の県境に立地する釈迦岳山地に源を発し、黒木盆地を経て平野部を西流する矢部川によって形成された扇状地上にある。

【歴史的環境】

「八女」の名が文献に記されるのは思いのほか古く、西暦720年に舎人親王や太安麻呂等によって編纂された「日本書紀」の景行紀18年の条文中には「八女県」（やめのあがた）の文字が見られる。

勿論、文字の使用が始まる以前の先史より八女の歴史は始まっており、立山山古墳群の調査では旧石器時代にさかのぼる細石器2点が出土している。縄文時代に入ると国武や立山、黒土地区等で早期後半～末に到る押型文土器（楕円文が主体）が多量に出土している。各遺跡の立地は大きく2地域に大別出来る。1つは八女丘陵裾部にあたる中位段丘上、もう1つは八女市の南西部地域、つまり矢部川が形成した低位段丘上である。これは隣市の筑後市域においても同様の結果（註1）が出ており、古環境復元の観点からも興味深い点である。

弥生時代に入ると、低台地上や平野部の微高地上に前～中期の遺跡が散見されるようになる。亀ノ甲遺跡や立野・大坪遺跡、宿町遺跡などは比較的規模の大きな環濠を有しており、当該期の環濠が1つのステイタスシンボルとしての意味を持っていたと考えられる。特に立野・大坪遺跡は2重の環濠を有しており、福岡市・那珂遺跡37次調査（註2）の2重環濠との類似性も何われ、集落形成時における設計図的な約束事が玄界灘地域から直接的に流入している事を感じさせる。後期に入ると、市内各所で集落、墳墓域が増加する。中でも特に柳瀬に所在する茶ノ木ノ本遺跡では、3号甕棺の棺外に内行花文鏡1面、中型の鉄戈1口が副葬され、5号甕棺でも深樋式銅剣1口が棺外に副葬されるなど、市内域でも集団内階層差が顕在化してきた事を示唆している。



1. 廣川林遺跡2次・3次 2. 西中沢遺跡 3. 坊野遺跡 4. 弥五郎遺跡 5. 野口遺跡 6. 道添遺跡 7. 室岡遺跡群
8. 亀ノ甲東原遺跡 9. 亀ノ甲遺跡 10. 岡山公園古墳 11. 室岡工業団地内遺跡 12. 岡山小学校校庭遺跡
13. 松ノ外遺跡2次 14. 鵜池・野田遺跡 15. 大西前遺跡 16. 樋の口遺跡2次 17. 土穴遺跡 18. 立野・六反田遺跡
19. 立野・大坪遺跡 20. 川原遺跡 21. 井手口遺跡 22. 井手口遺跡 23. 篠原遺跡 24. 前田・大坪遺跡
25. 中里遺跡 26. 西田前遺跡 27. 水町遺跡 28. 吉書田遺跡 29. 宮ノ后遺跡 30. ヒヤケ遺跡 31. 六反田遺跡

第1図 廣川林遺跡3次調査周辺遺跡分布図〔1/25,000〕



1. 廣川林遺跡3次調査南地区
2. 廣川林遺跡3次調査北地区
3. 廣川林遺跡2次調査1区
4. 廣川林遺跡2次調査2区
5. 室岡工業団地内遺跡2次
6. 室岡工業団地内遺跡3次
7. 室岡工業団地内遺跡4次
8. 曲田遺跡
9. 上柳遺跡
10. 松ノ外遺跡2次
11. 廣川林遺跡

第2図 廣川林遺跡3次
調査位置圖(1/5,000)

古墳時代の前半期では深田遺跡や平田・六反田遺跡などで豪族居館跡と称される方形、又は、突出部を持った環濠が出現し、前時代より続く勢力の編成が進んでいるものと考えられる。後期に入ると八女丘陵上に大型前方後円墳を含む大古墳群が形成され、岩戸山古墳を筆頭とする筑紫君の奥津城が成立する。しかし平野部に目を転じると、当該期の集落等は殆ど未検出で、古墳群の形成基盤等の問題についても、その形成前後を含めて論議出来る段階にはない。

奈良・平安時代に入ると、一般集落とは隔絶した施設が見られるようになる。黒土地区における風流松遺跡では築地塀の柱穴列や雨落ち溝などが検出され、官衛的な色彩の強い施設と考えられる。また、隣接する黒土・新替遺跡4地点では11世紀頃の軒丸・軒平瓦がまとまって出土するなど、通常の集落では見られない遺物が見られる。

中・近世においては山城の調査例など数例があるものの、未だ端緒についたばかりである。

(註1) 立石真二編 2000「筑後西部第2地区遺跡群(Ⅲ)」筑後市文化財調査報告書 第27集

(註2) 吉留秀敏編 1994「那珂11」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第366集

Ⅲ 発掘調査の概要(南地区)

開発区域内の南側部分をその対象地とし、バックフォーによる表土除去後、人力での遺構検出を行った。当初遺構検出面には多数の攪乱の存在を予想していたが、思いのほか少なかった。しかし、表土を除去すると直下より遺構が出現する為、過去に大規模な削平があったものと考えられる。結果として溝状遺構や竪穴土壌を検出したが、遺構の密集度は極めて低かった。

以下、出土遺構・遺物についての説明を行う。

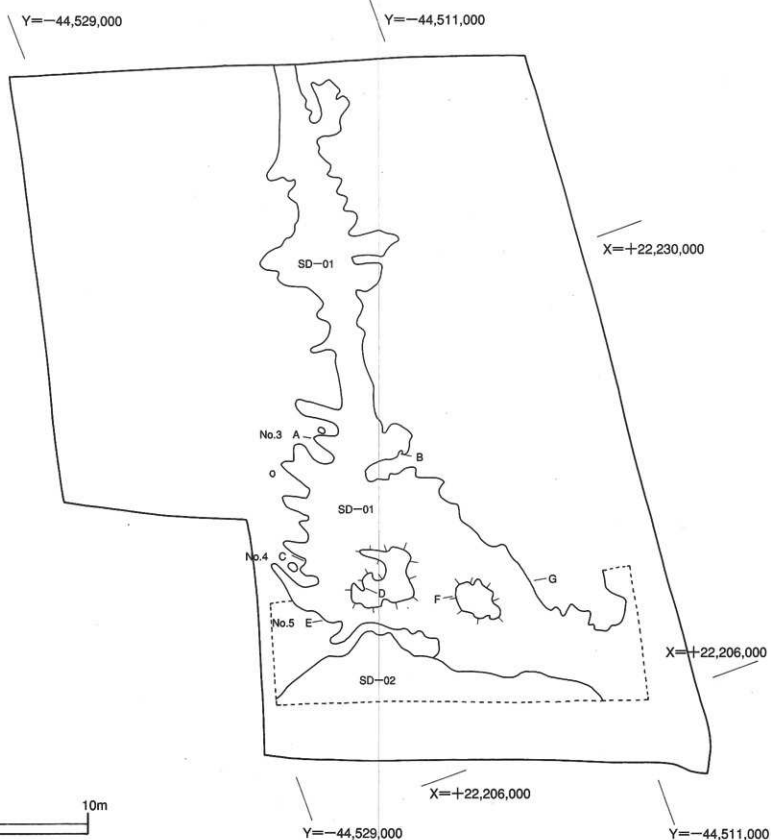
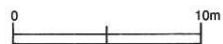
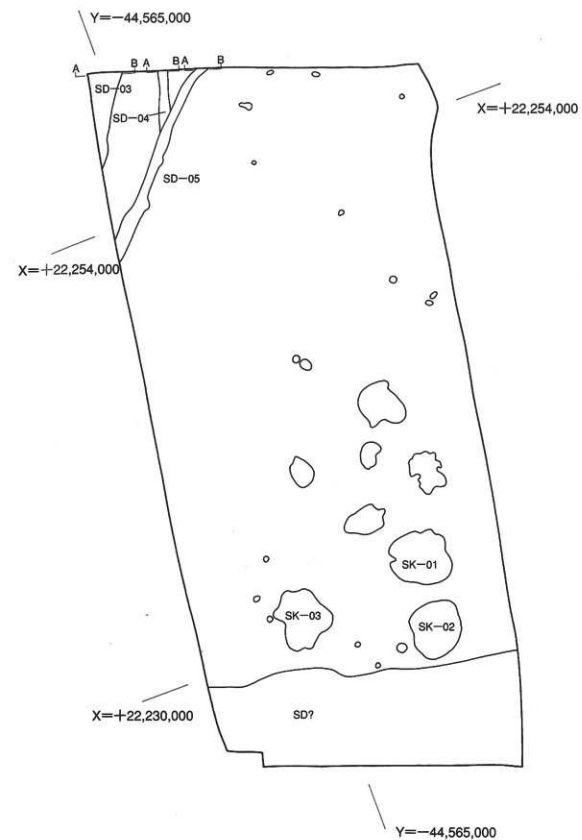
〈遺構と出土遺物〉

1 溝状遺構(SD)

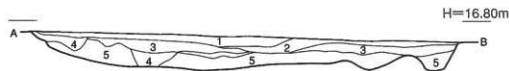
南地区の調査では人為的掘削が行われたと考えられる溝4条と、自然河川と考えられる溝の一部を検出した。今回はこれらをまとめて溝状遺構とし、各遺構の呼称は「溝」を使用した。

SD-01

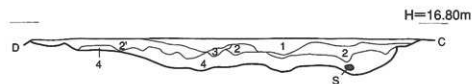
調査区東側のほぼ中央部を北から南に向かって流路をとる溝で、氾濫源と思われる南側部分の不規則な溝筋を含めSD-01で一括した。南側部分では、SD-02と



第3図 廣川林遺跡3次調査遺構配置図(南地区) [1/200]



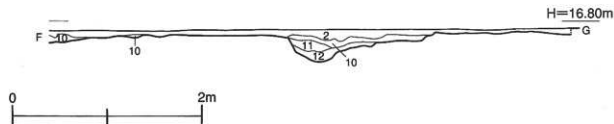
- SD-01 Na3
- 1. 黒色粘質土
 - 2. 茶灰色粘質土(黒茶色土粒子混)
 - 3. 黄灰色粘質土(若干砂質気味、黒茶色土粒子混)
 - 4. 茶灰色粘質土+黄橙色粘土(少量)
 - 5. 灰色粘質土+黄橙色粘土粒



- SD-01 Na4
- 1. 黒灰色粘土
 - 2. 黄灰色砂質粘土(こげ茶粒少量入る)
 - 2'. 黄茶色粘土(こげ茶粒少量入る)
 - 3. 灰色粘土
 - 4. 黒灰色粘土+黄橙色粘土ブロック(若干砂質まじり)



- SD-01 Na5
- 1. 暗黒灰色粘質土
 - 2. 黒灰色粘質土
 - 3. 黒灰色粘質土(茶灰色気味)
 - 4. 暗灰色粘質土
 - 4a. 暗灰色粘質土(黄色粘土ブロック混入)
 - 4b. 暗灰色粘質土(黄灰色粘土が微量)
 - 5. 暗黒灰色粘質土+黄褐色粘土ブロック(地山崩落)
 - 5a. 黒灰色粘質土+黄色粘土ブロック(微量)
 - 6. 黒茶色砂質土(微量の褐色土ブロック)
 - 6a. 黒茶色砂質土(微量の炭化物)
 - 6b. 黒茶色砂質土(粘性強い)
 - 7. 暗茶灰色砂質土(炭化物多い、茶色強い)
 - 8. 淡黒灰色粘質土(細砂粒多い)
 - 9. 黄褐色粘土+黒灰色粘土
 - 10. 暗黄灰色粘質土(暗褐色気味、黄色土ブロック含)
 - 11. 淡黄灰色砂質土(黄色粘土ブロック多い)
 - 12. 淡黄灰色砂質土(黄色粘土ブロック少ない)



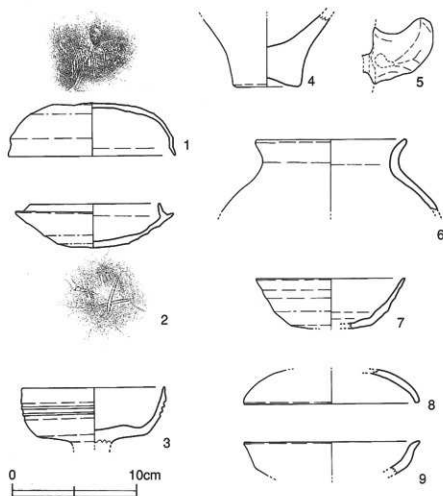
第4図 SD-01Na3~Na5土層断面実測図[1/40]

接続している。溝底面のレベル観察では、北から順次南に向かいその高さを減じている事から、水流方向も流路と同じく北～南であったと考えられる。規模は、検出長43.5m、幅1.1m～2.4m（氾濫源では5.8m～9.6m）、深さ0.2m～0.3mを測る。

出土遺物として須恵器、土師器等があった。

出土遺物

1は須恵器杯蓋で、口縁部内面に段を有す。口縁端部は回転ヨコナデによりやや外反気味におさめている。天井部外面には7本線のヘラ記号が見られる。内面から体部外面はナデ、又は、回転ヨコナデ。天井部外面はヘラ削りを行うが、概して浅い。色調は全体的に青灰色を呈すが、一部に暗茶褐色部分が認められる。胎土は精良で、焼成も良好。復原口径13.3cm、器高4.2cmを測る。2は須恵器杯身で、立ち上がりの内傾化が進み、低くなりつつある。底部外面には「×」字状のヘラ記号が見られる。内面から体部外面はナデ、又は、回転ヨコナ



第5図 SD-01出土土器実測図〔1/3〕

デを施し、底部外面にはヘラ削りを行う。ヘラ削りは体部中位までで、方向は左回転である。色調は全体的に淡青灰色を呈している。若干石英砂粒を含むが胎土は精良で、焼成も良好。口径10.3cm、器高3.5cmを測る。3は須恵器高杯で無蓋のものである。本来脚部があったと思われるが、現在は欠失している。杯部の外面には三条の沈線が刻まれているが荒い。杯部内外面は回転ヨコナデを施し、外底面はカキ目を行う。色調は内外面共に暗灰色を呈している。胎土は砂粒等をほとんど含まず精良で、焼成も良好。杯部の口径は11.3cmを測る。4は弥生式土器の甕の底部片で、やや厚手の底部から外反気味の胴部が続く。若干上げ底を成している。胎土には砂粒を多く含み、

色調は内外面共に淡黄褐色を呈している。焼成はやや不良で、外面の一部に黒斑の痕跡を有している。底径5.0cmを測る。5は土師器の把手片である。器種は不明。全体的に短小であるが身は厚く、下部に擦痕等は確認出来ない。全てナデで仕上げられており、色調は淡褐色を呈している。6は土師器壺の口縁部と思われるが、磨滅著しく、判然としない。焼成は悪く極軟質となっており、色調は内外面共に暗赤褐色を呈す。復原口径は12cmを測る。7は須恵器杯身で、体部は若干内湾気味に開く。内外面共に回転ヨコナデを施すが、外底面は判然としない。色調は白灰色を呈し、胎土は精良。焼成はやや不良で軟質である。復原口径11.8cm、器高5cmを測る。8は土師器蓋である。やや深みがあり、全体的に丸みをもつ。口縁端部はフラット気味におさめる。磨滅著しく、調整等は不明。色調は内外面共に淡黄褐色を呈している。胎土は精良であるが焼成はやや不良。復原口径14cmを測る。9は土師器の口縁部片で、器種は不明。杯部の上半で内湾した後、端部で短く外反する。調整は端部周辺でヨコナデを施し、その他はナデで仕上げる。色調は内面で淡褐色、外面で暗茶色～白灰色を呈す。焼成は良好で、胎土も精良。復原口径14cmを測る。

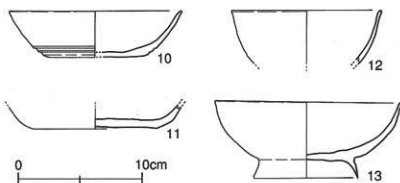
SD-02

調査区東側南端で検出した溝で、SD-01に接続している。溝底面のレベル観察のみでは水流方向は判然としないが、周辺の現況から判断すれば、南側に隣接する現在の花宗川の旧態と考えられ、流路方向は東～西方向であったと考えられる。規模は、検出長17.7m、幅1.3m～3.8m、深さ0.5mを測る。

出土遺物として、土師器等があった。中でも上層埋土中より黒色土器A類が出土しており、その下限を知る1つの手掛かりとなるであろう。

出土遺物

10は土師器杯身で、ヘラ切り底の底部から内湾した口縁部へと続く。体部下半には沈線状の段が数段見られる。調整は内外面共にナデ仕上げであるが、内底面には指圧痕が見られ、外底面はヘラ切り未調整である。色調は内面が暗白灰色、外面が淡褐色を呈している。焼成は良好で胎土も精良。



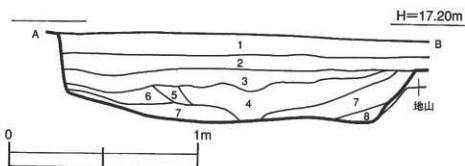
第6図 SD-02出土土器実測図〔1/3〕

復原口径13.8cm、復原底径7.8cm、器高3.7cmを測る。11は土師器杯身で、底部から内湾した体部へと続く。調整は内底面～体部外面はナデ、外底面はヘラ切り後ナデ仕上げである。色調は内外面共に淡白黄色～淡白灰色を呈す。焼成は良好で、胎土も

精良。復原底径9.8cmを測る。1 2は土師器椀で、黒色土器A類である。磨減著しく、調整等は判然としないが、一部にナデが見られる。煤の蒸着は口縁端部外面まであり、体部外面の色調は淡黄茶色を呈している。焼成は良好で胎土も精良。復原口径は12cmを測る。1 3は土師器椀で高台の付く底部より、強く内湾した体部が続き、口縁端部でわずかに外反する。外底面のやや外寄りに付された高台は、やや丸みを持ちながら先細り状に端部を鋭くおさめる。調整等は磨減著しく判然としない。色調は内外面共に淡白褐色を呈す。焼成はやや不良で、器面は極軟質である。胎土は精良。復原口径14.8cm、復原底径8.3cm、器高6.1cmを測る。

SD-03

調査区西側北端で検出した溝。流路方向は不明。規模は、検出長5.1m、幅1.5m + α 、深さ0.1m~0.2mを測る。出土遺物無し。

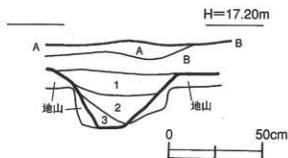


1. 淡灰褐色土(耕作土)
2. 黄灰色土(床土)
3. 黒茶色土
4. 茶灰色粘質土
5. 黄茶灰色土
6. 黄灰色土
7. 茶灰色粘質土(黄褐色粒混)
8. 茶灰色粘質土(炭化物有)

第7図 SD-03土層断面実測図(1/20)

SD-04

調査区西側北端で検出した溝で、SD-05と接続している。溝底面のレベル観察から、南南西に流路をもっていたと考えられる。規模は、検出長3.4m、幅0.4m~0.6m、深さ0.2mを測る。出土遺物無し。



- A. 黄灰色土
- B. 黒色土(ボクボク)
1. 黒色土(ややしまる)
2. 黒茶色土
3. 黒茶色土(黄褐色粒子+黒色炭化粒)

第8図 SD-04土層断面実測図
(1/20)

SD-05

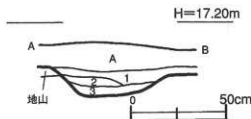
調査区西側北端で検出した溝で、SD-04と接続している。溝底面のレベル観察から、南西に流路をもっていたと考えられる。規模は、

検出長11m、幅0.5m～0.8m、深さ0.1m～0.3mを測る。出土遺物無し。

2 竪穴土壌 (SK)

SK-01

調査区西側南端において検出した土壌。東側半分に基盤土の一部と思われる黄色砂礫土が表出していることから、「風倒木痕」と呼称される竪穴土壌と考えられる。規模は、長軸長3.3m、短軸長3.1m、深さ0.4mを測る。平面プランは不整形を呈している。出土遺物無し。



- A. 黄灰色土
1. 黒色土(ややしまる)
2. 黒茶色土
3. 黒茶色土(黒灰色土混)

第9図 SD-05土層断面
実測図(1/20)

SK-02

調査区西側南端において検出した土壌。南側半分に黄色砂礫土を有し、SK-01同様の竪穴土壌と考えられる。未掘の為、深さについては不明であるが、長軸長3.2m、短軸長2.7mを測る。平面プランは不整形円形を呈している。

SK-03

調査区西側南端において検出した土壌。北西側半分に黄色砂礫土を有し、前者同様、竪穴土壌と考えられる。未掘の為、深さについては不明であるが、長軸長3.3m、短軸長3.1mを測る。平面プランは不整形を呈している。

IV 発掘調査の概要(北地区)

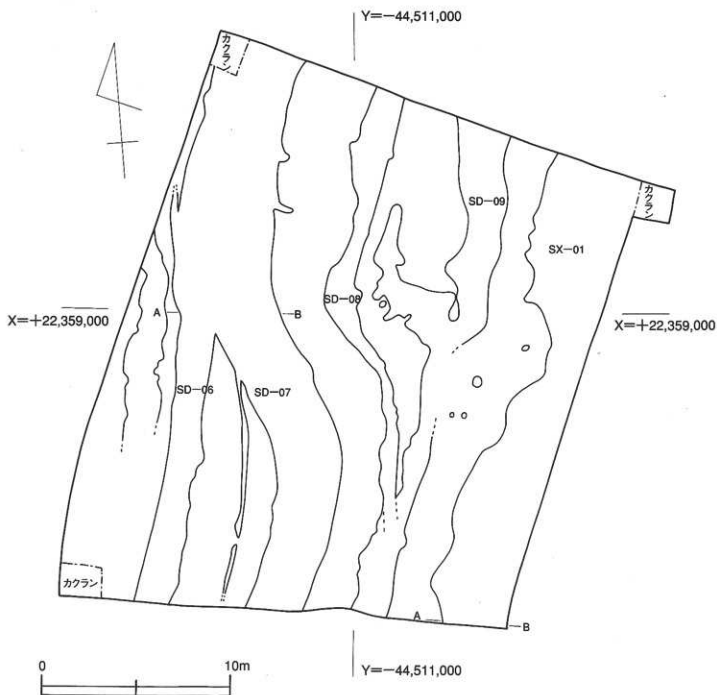
開発区域内の北側部分をその対象地とし、バックフォーによる表土除去後、人力での遺構検出を行った。試掘、及び、踏査の結果から、北地区には近世以降の溝以外の遺構は考えられず、又、遺物等もほとんど期待出来ないと判断していたが、出土遺物の絶対量こそ少ないものの、多種多様の溝や、弥生時代・平安時代に比定し得る遺物が出土した事は、当該地の歴史に厚みをもたらす意味で、歓迎すべき発見であった。

以下、出土遺構・遺物についての説明を行う。

〈遺構と出土遺物〉

1 溝状遺構 (SD)

北地区も南地区同様、4条の溝を検出した。しかし、溝としての機能を十分に果たしたか否か容易に判断し得ないもの(SD-08・09)もあった為、今回は溝状遺



第10図 廣川林遺跡3次調査遺構配置図(北地区) (1/200)

構として一括した。但し、各遺構の呼称は「溝」を使用している。

SD-06

調査区西端部で検出した溝で、SD-07を切っている。溝底面のレベル観察では、北から順次南に向かいその高さを減じている事から、流路方向は北～南であったと考えられる。規模は、検出長17.5m、幅1.9m前後、深さ0.41m～0.51mを測る。

出土遺物として、土師器や磁器等があった。

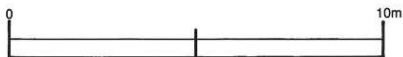
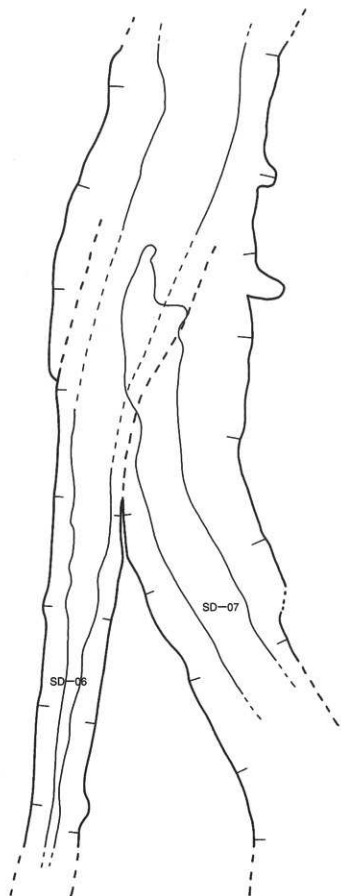
出土遺物

17は土師器の杯身で、外底部のやや外寄りに貼り付けの高台を有す。体部は緩やかな丸みをもち、体部と底部の境が明瞭ではない。調整は内外面共にナデ仕上げで、色調は白灰色を呈す。胎土は精良で焼成も良好であるが、やや軟質気味である。復原底径6.8cmを測る。

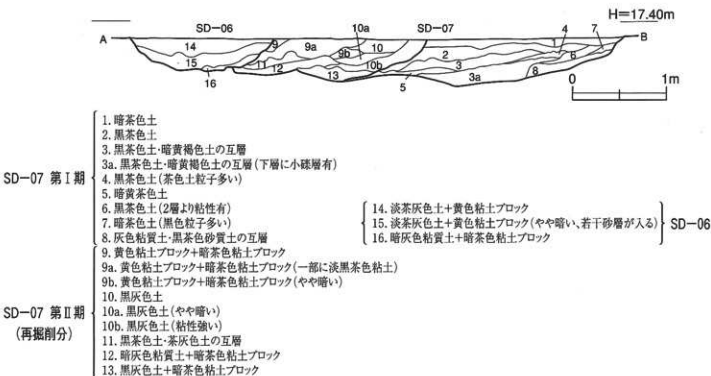
14は土師器の小皿で、糸切りである。体部には浅い沈線状の段を数段有す。内面はナデ調整。色調は内外面共に淡黄褐色を呈す。胎土はやや不良で、数ミリの小石を含む。焼成は良好。復原口径8.8cm、復原底径7cm、器高1.6cmを測る。16は白磁碗で、内面見込みは蛇の目釉剥ぎを施す。体部外面下半には施釉が無く、高台畳付は擦痕著しく、器面が滑らかとなる。胎土は白灰色で精緻。釉は青白色気味で光沢あまりなく、薄い。底径4.5cmを測る。

SD-07

調査区西端部で検出し



第11図 SD-06・07における切り合い関係 [1/100]



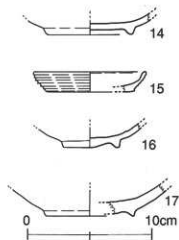
第12図 SD-06-07土層断面実測図[1/40]

た溝で、SD-06に切られている。溝底面のレベル観察では、わずかに南に高さを減じていることから、南南西に流路をもっていたと考えられる。規模は、検出長30.5m、幅3.5m~5.6m、深さ0.3m~0.47mを測る。

出土遺物として土師器等があった。

出土遺物

17は土師器の椀で、外底部外寄りに断面三角形の高台を貼り付ける。器面の磨滅著しく、調整等は不明。色調は内外面共に淡黄灰色を呈す。胎土は精良で黒灰色。焼成はやや不良。復原底径7cmを測る。



第13図
SD-06-07出土土器
実測図[1/3]

SD-08

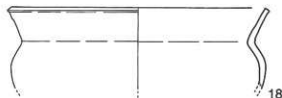
調査区中央部で検出した溝。SD-09を切っているか？ 溝底面はわずかに北に下がっているが、流路方向を示すか否かは判然としない。規模は、検出長28m、幅0.8m~1.4m、深さ0.1mを測る。

出土遺物として弥生式土器等があった。

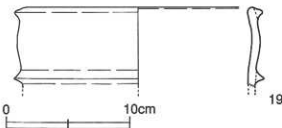
出土遺物

18は弥生式土器の甕の口縁部片で、丸みを帯びた胴部から「く」の字に屈折した頸部を介し、直線的に外方に延びる口縁部へと到る。口縁端部上面は、つまみ出し状

に強くヨコナデを施す。体部内外面はナデ調整。色調は体部が淡茶褐色、口縁端部が黒灰色を呈す。胎土には1～2mmの砂粒を多く含む。焼成は良好。復原口径21.2cmを測る。



SD-09
調査区中央部で検出した溝。SD-08に切られるか？ 溝底面はわずかに南に下がっているが、流路方向を示すか否かは判然としない。規模は、検出長29.5m、幅1.4m～2.9m、深さ0.1m～0.2mを測る。



第14図 SD-08・09出土土器実測図 [1/3]

出土遺物として、弥生式土器等があった。

出土遺物

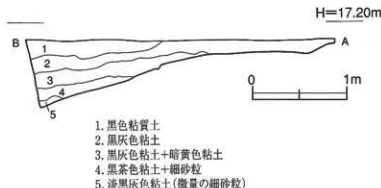
19は弥生式土器の甕の胴部～口縁部破片で、やや内湾気味の口縁部に断面三角形の貼り付け突帯が端部に付く。胴部にも同様の突帯が貼り付くが、共に刻目は認められない。調整は磨滅著しく判然としない。色調は内外面共に淡茶灰色を呈すが、内面下半部は淡黒灰色を成す。胎土には1～3mmの砂粒を多く含む。焼成は良好。復原口径は外径で20cmを測る。

2 不明遺構 (SX)

調査区東端において検出した遺構であるが、いかなる用途に供されたものか不明であった為、ここでは不明遺構として取り扱う事とした。

SX-01

調査区東端で検出した。検出時のプランは若干蛇行気味で、当初は旧河川と考えていたが、堆積土は粘土、及び、粘質土が大半を占め、わずかに細砂粒が混入する状況であった。また、掘削後の底面がわずかにフラット状を呈していた為、現在は湿地状、又は、池状の遺構であったと考えている。規模は、検出長25m、幅1.8m～4.9m+α、深さ0.4m～



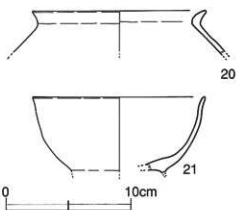
第15図 SX-01土層断面実測図 [1/40]

0.5mを測る。

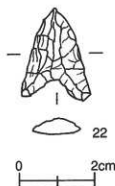
出土遺物として、堆積土上層より土師器、下層及び底面から弥生式土器、石鏃等があった。

出土遺物

20は弥生式土器の壺の胴部上半～口縁部の破片で、口縁部は強く短く外反する。磨滅著しく、調整は判然としない。色調は内外面共に淡茶褐色を呈す。胎土には砂粒をほとんど含まず、精良。焼成は良好。復原口径13.8cmを測る。21は土師器碗で、黒色土器A類である。調整は、内面の一部にミガキが見られ、外面にはヨコナデが見られる。煤の蒸着は内面～口縁端部外面まであり、体部外面の色調は淡茶色を呈する。胎土は精緻で焼成も良好。復原口径13.8cmを測る。22はサヌカイト製の石鏃である。基部は凹基で二等辺三角形形状を成す。長さ2.4cm、幅1.8cm、厚さ0.4cmを測る。



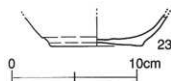
第16図 SX-01出土土器実測図
[1/3]



第17図 SX-01出土石鏃
実測図 [1/1]

3 その他（排土中出土土器）

23は土師器杯身で、粘土を薄く充填し形成した底部より、やや内湾気味に体部が開く。外底部の一部にヘラ切り痕が認められる。磨滅著しく、内外面の調整は判然としない。色調は内外面共に淡黄褐色を呈す。胎土は精良だが、焼成はやや不良。復原底径7.4cmを測る。



第18図 排土中出土土器
実測図 [1/3]

V おわりに

今回の調査では、事前予測と大差ない成果と、逆にその予測に反した結果の2つがあった。前者は近世以後の遺構の検出と検出遺構頻度の低さであり、北地区でのSD-06・07の検出、及び、南地区での遺構密集度の低さがこれに該当する。

後者は主たる時期が縄文時代ではなく、それ以後の古墳時代後半～平安時代中頃までの時期に比定される遺構・遺物の検出であり、南地区のSD-01・02、北地区でのSX-01がこれに該当する。

前述した事前予測は、これまで調査した周辺の遺跡内容が1つの根拠となっている。このことについて、若干記述してみる。

便宜上、八女市西部地域（第1図・第2図参照）を八女インターチェンジを基点として①北東区、②北西区、③南東区、④南西区の4地区に区分けし、周辺の遺跡内容と時期を概観してみると、①の北東区では、亀ノ甲遺跡を代表とする室岡遺跡群があり、弥生時代前期から後期までの遺跡が非常に高密度で検出されている。環濠や、それに伴う住居群、石棺・甕棺等の墳墓、そして青銅製品や鉄製品等の出土もあり、弥生時代の全期間を通じて継続的・拠点的な集落が存在していたと考えられる。②の北西区では、室岡工業団地内遺跡や弥五郎遺跡を代表とする遺跡群があり、弥生時代後半期の集落・墳墓群に加え、古墳時代後期・奈良時代後期の住居群が点在し、集落を構成している。③の南東区では、平成7年度に調査した大西前遺跡、松ノ外遺跡2次調査、鶴池・野田遺跡等があり、いずれも鎌倉時代～江戸時代前半頃の溝や掘立柱建物、古墓等が検出された、比較的新しい時期の遺跡が集中している。④の南西区になると様子は一変し、これまで検出されていた建物等が一切姿を消し、又、遺構の検出頻度が激減。落とし穴状遺構や近世以後の小規模な溝、古墓等がわずかに検出されているのみにとどまっている。これは隣市・筑後市の一部においても同様の状況が見られ、これまで付近一帯は、過去、居住はおろか耕作等の生産活動さえ著しく低かったものと考えられていた。

これまで概観して来た内容通りに考えれば、今回の調査により南西地区で古墳時代・平安時代に該当する遺構が検出された事は驚きであり、古代から近世に到るまでの当地の歴史的状況を、今一度詳細に検討しなければならない時期に来ていると思われる。但しこれは今までの成果の再検討のみならず、隣市を含む周辺の状況も鑑み、新しい調査・発見例の増加が不可欠である。

今後の調査成果に期待しつつ、取るに足らない稚拙なおわりとしたい。

PLATES



1. SD-01及びSD-02全景（北西より・後方は花宗川）



2. SD-01 全景（南より）



1. SD-01 東側近景 (南より)



2. SD-01 No5土層断面 (南より)



1. SD-01 No. 01 須恵器出土状況



2. SD-01 No. 01 須恵器近景



1. SD-03 全景 (南より)

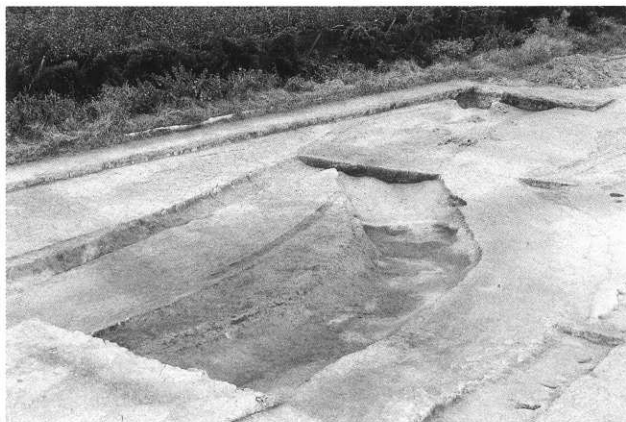


2. SD-04・05 全景 (南より)

PL 5



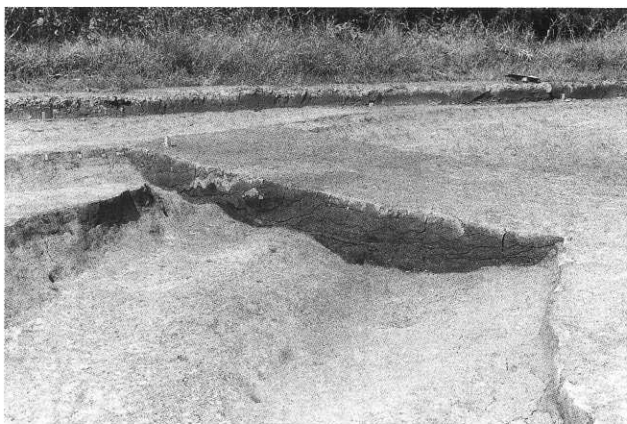
1. 北地区全景（南より）



2. SD-06・07 全景（南東より）



1. SD-06・07 切り合い付近（北より）



2. SD-06・07 土層断面（南東より）

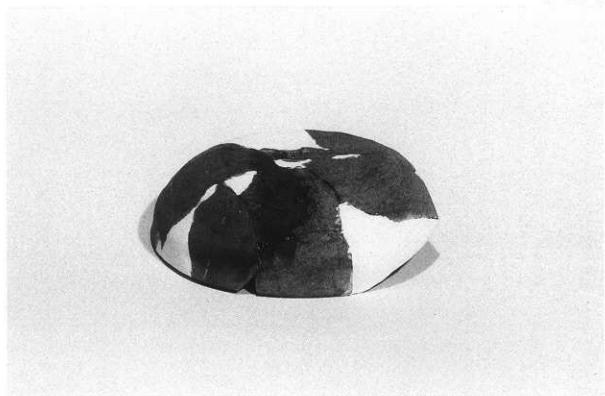
P L 7



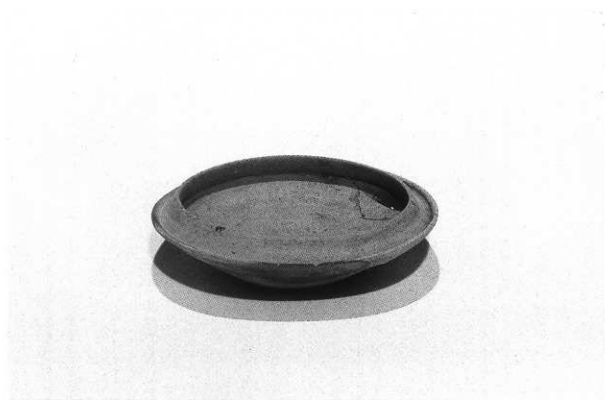
1. SD-08・09 全景 (南より)



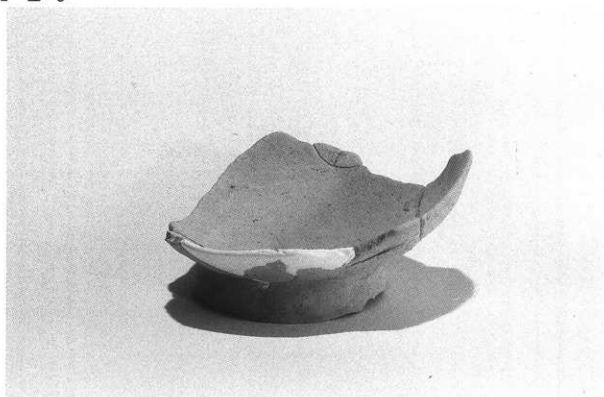
2. SX-01 全景 (南より)



1. SD-01 出土須恵器 (杯蓋)



2. SD-01 出土須恵器 (杯身)



1. SD-02 出土土師器



2. SD-02 出土土師器 (左：外面、右：内面)

報告書抄録

ふりがな	ひろかわばやし いせき 3 じちょうき						
書名	廣川林遺跡 (3 次調査)						
副書名	福岡県八女市大字鶴池所在遺跡の調査報告						
巻次	第 2 分冊						
シリーズ名	八女市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第 66 集						
編著者名	大塚恵治						
編集機関	八女市教育委員会						
所在地	834-8585 福岡県八女市大字本町 6 4 7 TEL 0943-23-1982						
発行年月日	西暦 2002年3月29日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
ひろかわばやし 廣川林遺跡 (3 次)	ふくおかけん 福岡県 やめし うのいけ 八女市大字鶴池 ひろかわばやし 字廣川林	402109	33° 11' 58"	130° 31' 20"	200006 ~ 200010	2,350m ²	鶴池第 2 工業団地 造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項		
廣川林遺跡 (3 次)	その他の 遺跡	古墳・平安 江戸時代	不明遺構、溝、 竪穴土壌	陶磁器類、石鏃、須恵器 土師器			

廣川林遺跡（3次調査）

八女市文化財調査報告書

第66集

平成14年3月29日

発行 八女市教育委員会
八女市大字本町647
郵便 八女市大字吉田189-1
印刷